

## 【p 70～ p 75】 函館で出会った人 ―工楽松右衛門―

### 1 資料活用にあたって

- 長文のため事前に読ませておく。
- 高田屋嘉兵衛の業績を紹介し、P 71の15行目の磯部さんが言った「半分」の意味を教師が説明する。
- 本資料では、工楽松右衛門の生き方を通して働くことの意義を考えさせる。内容項目C（14）については、勤労が自分のためだけではなく、社会生活を支えるものであることを理解し、社会への奉仕活動など公共のために役立つ活動に目を向け、積極的に取り組むことができるようにすることが大切である。

### 2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：雄太（子どもが「雄太」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 変化するきっかけ（助言）は：磯部さんが語る帆布を独りじめしなかった松右衛門についての話
- 変化するところは：「えっ！」雄太はおどろいた。そして感心した。

### 3 読み物資料の素材について

#### 【参考URL】

- ・ 兵庫県高砂 工楽松右衛門公式サイト  
<https://matsuemon.net/deed.html>
- ・ 海拓者たち 日本海洋偉人列伝（一般社団法人 日本埋立浚渫協会HP内）  
<https://www.umeshunkyo.or.jp/marinevoice21/kaitakusya/259/index.html>

#### ○ 工楽松右衛門について

- ・ 1743年（寛保3） 播磨の国高砂（現在の高砂市）の船乗り・宮本松右衛門の長男として生まれる。
  - ・ 1758年（宝暦8） この頃、兵庫に出て佐比絵町にある御影屋という船主のもと、船乗りとなる。その後、兵庫の廻船問屋北風荘右衛門に知遇を得て、その斡旋で佐比絵町に店を構え、船持船頭として独立する。
  - ・ 1785年（天明5） 従来の破損しやすい脆弱な帆に代わり、木綿を使った厚手大幅物の帆布の織り上げに成功。「松右衛門帆」として全国的に普及。この「松右衛門帆」の考案により、航海術が飛躍的に向上し、結果として北前船の北方領土進出が現実的となった。
  - ・ 1790年（寛政2） 幕府より、択捉島での埠頭建設の命令が下る。同年5月、自前の船に資材を積み込み、択捉島へ出発。
  - ・ 1791年（寛政3） この年の夏、択捉島での埠頭建設竣工。
  - ・ 1802年（享和2） 幕府より、「工夫を楽しむ」の意から、「工楽」の姓を賜る。
  - ・ 1804年（文化元） 函館にドックを築造。その後、択捉開発や蝦夷地交易に使った函館の地所を、高田屋嘉平に譲る。
  - ・ 1812年（文化9） 70年の生涯を終える。墓所は現在の神戸市兵庫区にある。
- ・ 松右衛門は42歳の時に、従来の和船に用いられてきた藁を編んだむしろや2～3枚の綿布を重ねて紡いだものに代わり、木綿の細糸をより合わせた太糸を使い、厚手の一枚布を織り上げる方法を考案。この新しい布は、耐久性に優れ軽く扱いやすいことから瞬く間に全国に普及し、「松右衛門帆」と呼ばれるようになった。現在の帆布にも受け継がれる、すだれ織りの誕生である。また松右衛門は、新巻鮭を保存食として考案した人としても知られる。

## 4 展開の具体例

### 函館で出会った人 —工楽松右衛門—

- ・ **主題名** ・ 社会に役立つ仕事 C (14)
- ・ **資料の概要** ・ 母たちと訪れた函館で、タクシー運転手から「函館の恩人」として函館港を開いた工楽松右衛門の名前を聞かされ、高田屋嘉兵衛のことが頭に浮かんだ雄太は当惑する。運転手から、工楽の仕事として帆布等の発明も教えてもらったが、「お金が目的なのでは」と考えてしまう。しかし、運転手から、工楽が帆布の技術を独り占めしなかったことを聞かされた雄太は、世のため人のために仕事に取り組んだ工楽の姿を思い浮かべる。
- ・ **ねらい** ・ 磯部さんが語る帆布を独り占めしなかった工楽松右衛門についての話を聞いて道徳的に変化する雄太を通して、働くことの意義を理解し、公共のために役立つとする道徳的実践意欲を育てる。

#### 展開の概要

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	
導入	・ 今日の資料に興味を持つ。	函館の場所を地図帳で確かめましょう。	
展開	・ 資料の範読を聞きながら黙読をする。	運転手の磯部さんの説明に「ふうん…」言いながらうなずく雄太は、どんなことを考えていたのでしょうか。	高田屋嘉兵衛の業績を紹介し、P71の「半分」の意味をつかませておく。
	・ 函館の港を実際につくったのが工楽であることを聞かされた主人公の気持ちを考える。	・ 工楽さんはたいした人かもしれないが、仕事は頼まれてやってただけではないのか。 ・ 函館の恩人なんていうのは大げさだ。	高田屋嘉兵衛ではないと言われた主人公が、反発の気持ちで素直に納得できないことをおさえる。
	・ あら巻サケや松右衛門帆の業績について聞かされた主人公の気持ちを考える。	雄太は、どんなことを思いながら「きっと大金持ちになったんでしょ」と言ったのでしょうか。	主人公が、素直に納得できないのは、まだ反発を感じているとともに、「仕事はお金儲けの手段」という意識を主人公が持っているためであることをおさえる。
	・ 工楽が帆の技術を独り占めしなかったことを聞かされた主人公の気持ちを考える。	・ すごい発明をしたかもしれないけれど、お金儲けのためにやったんだろう。 ・ 工楽さんも、お金儲けのために、自分の財産を増やしたり名誉を得るために仕事に打ち込んだのだろう。	工楽松右衛門が帆の技術を独り占めしなかったことを知り、驚き、感心している主人公の心に共感さ
・ 眼下に広がる函館の港を見ながら工楽のことを思う主人公の気持ちを考える。	「えっ！」と声をあげた時、雄太はどんな気持ちだったのでしょうか。 ・ 大儲けができるチャンスだったのに、おどろきだ。 ・ 一人で儲けることよりも、みんなのことを考えるなんてすごい人だな。 ・ 「大金持ち」なんて言って悪かったな。	磯部さんの「世のため、人のため」という言葉をきっかけとして、主人公が「社会に役立つために働こう」という実践意欲を強めていることをおさえる。	
・ 眼下に広がる函館の港を見ながら工楽のことを思う主人公の気持ちを考える。	「世のため、人のため、か……」とつぶやきながら、雄太はどんなことを考えていたのでしょうか。 ・ 世のため、人のために働くってかっこいいな。 ・ 函館の人が「恩人」と思う気持ちがわかるような気がする。 ・ 自分のためだけでなく、みんなを支えるために働く気持ちを大切にしよう。		
終末	・ 自分の考えを書く。	自分の考えを道徳ノートに書きましょう。	